

## 滴石史談会 3月公開歴史講座

うわのこういち  
テーマ「洋画家上野広一と原敬」

講師 … 原敬記念館主任学芸員 田崎 農巳 (あつみ) 氏

日時 … 3月19日(日) 午後2時から3時半ごろまで

会場 … 雫石町中央公民館 視聴覚室

聴講料 … 200円



上野広一 氏

講座終了後、講師とともに  
廣養寺所蔵・平井大全師  
の肖像画作品(右写真)を  
見学予定です。



上野広一氏は明治19(1886)年、県議会議員上野広成の長男として雫石村上町に生まれる。雫石尋常小学校(現在の雫石小学校)、盛岡高等小学校(現下橋中学校)卒業、同37年盛岡中学校(現盛岡一高)を終えて上京。当時の洋画界の重鎮山本芳翠の門に入る。

芳翠没後、当時の内務大臣原敬の庇護、後援により同40(1907)年渡仏、パリのアカデミージュリアンに入学、ジャンポール・ローランスに師事すること5年(同門に安井曾太郎、津田清楓らがいる。)、苦学中のところで、原敬から千円の送金を得て、高名な師について肖像画を専攻。滞仏12年、大正7(1921)年帰朝した。滞仏中、1914年のサロンに入選。帰国後は、原敬はもちろん数多くの皇族方や政治家(総理大臣米内光政ほか)の肖像画を描き、また「壁画」(明治神宮聖徳記念絵画館壁画「条約改正」等)の作品も知られている。

町内曹洞宗廣養寺本堂に同寺の三代前の住職平井大全師の肖像画作品がある。(右上の写真)

### ＜啄木との交友深く、啄木と節子さんの結婚の媒酌人に…＞

上野氏は、歌人石川啄木と交友(啄木は盛岡中学で一年先輩)があったことでも知られている。氏は雫石尋常小学校を卒業後、盛岡の高等小学校に入り、一級下の石川啄木と交友がはじまった。盛岡中学時代は、下宿も近かったこともあり親しく浅からぬ関係があった。

とくに、明治38(1905)年、当時身体を悪くして帰省していた氏は、啄木と堀合節子さんの結婚について、両家の間を奔走し、結婚費用の一部まで出して式の準備を整え、啄木の帰省を待たせたが、幾日たっても何の音信もなかった。両家からは責められ、節子さんからは泣かれるという板挟みに陥り、方策も尽き6月1日(5月30日とも)、盛岡市帷子小路に移ったばかりの石川家で、花婿抜きで極めて変形の結婚式を挙げさせ、両家の主だった親戚8人に、氏が媒酌人という格好で列席したことが知られている。

昭和39(1964)年10月16日歿、道光院書鑑良照禅居士、廣養寺に眠る。

## 茶谷さんが「三閉伊一揆」の意義を熱く語りました



一揆で使用された「小  
〇(こまる)」の幟を示し  
て農民たちの怒りと知  
恵を熱く語る茶谷氏

28年度2月歴史講座を2月25日(土)に雫石公民館で開催しました。

今回の講師は、あきた芸術村民族芸術研究所理事で岩手日報に「三閉伊一揆」を150回にわたって連載した茶谷 十六(ちゃだに じゅうろく)氏でした。同氏は北浦史談会の理事でもある。

茶谷氏は「今、南部三閉伊一揆から受け継ぐべきもの」——東日本大震災をこえて——と題して、藩政時代に南部(盛岡)藩で二度にわたって発生した日本最大規模の一揆として知られる三閉伊一揆について、自作の詳細な資料をもとにその一部始終と一揆の意義を熱く語りました。この日の講座には会員 23 名と町民ら 15 名が来場し、茶谷氏の話に聞き入りました。



茶谷さんは仙北市田沢湖町のわらび座に半世紀近く所属する方で、民俗芸能の研究者として知られており、「秋田県文化功労者」でもある。(同封した講座資料の経歴欄をご覧ください。)

氏は、まず東日本大震災に触れ「あの津波で三陸地方の民俗芸能は壊滅したと思った。しかし、住宅より産業より、芸能の復活が早かった。これは民俗芸能の8割が亡くなった人々のための舞であることと深く関わっている。」と語った。「亡くなった人への舞、念仏剣舞は『鎮魂(たまはずめ)』のために舞われる。広い意味では『魂振り(たまふり)』とも言い、魂を奮い立たせることでもあるのだ。」

さらに「民俗芸能は人々の結束を必要とするし、その『講中』や『連中』の構成員が交わす誓約書ではなく村に何かあれば剣舞連中が率先して立て直しのために立ち上がる>ことになっている。これはまた、これから話す『一揆』にも通じるものがある。一揆とは心を一つにすること、だからだ。」と前置きした。



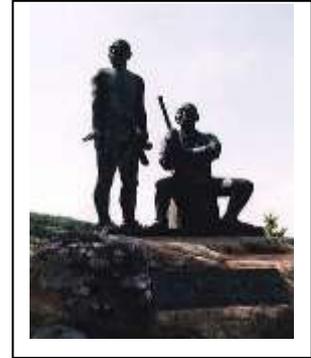
茶谷さんが高校教師を辞めてわらび座に入座したのは昭和44年、28歳の時だった。最初の仕事としてわらび座創始者の原太郎氏との対話から百姓一揆と芸能をテーマにした歌舞劇「東北の鬼」の創作と上演に関わることになった。そこで、かつて日本一の規模と聞いた三閉伊一揆取材するため三陸海岸を回ることになり、一揆発祥の地田野畑村を訪ねたのであった。

田野畑の地に降り立った茶谷さんの第一印象は「見渡す限りの雑木山(林)、幾重もの深い沢と猫の額ほどの畑地…荒涼とした風景。これでは貧しさゆえの一揆が起きてても不思議はない。」であった。

しかし、現地での取材と、さまざまな文献等の調査を重ねるうちに、やがて茶谷さんのこの第一印象は根底から大きく覆るのである。

茶谷さんは、まず当時の一揆について「捕まれば首謀者はお上(かみ)に刃向かった重罪人として極刑に処せられるということが分かっている、一揆は起こった。お上の苛斂誅求(かれんちゅうきゅう=税金をむごきびしく課し、とりたてること。)に耐えかねて突発的に、という例がほとんどだが、三閉伊一揆は、優れた指導者の下で綿密な計画による冷静な行動であった。」と評した。そして「優れた指導者は豊かな人間観を持っていた。例えば田野畑村の(畠山)多助は『衆民のため死ぬる事は元より覚悟のことなれば、今更命惜しみ申すべきや』と語ったという。それだけの覚悟があったればこそ成功したのだと茶谷さんは力説した。

【右の写真は田野畑村に建つ「三閉伊一揆の像」。弘化の一揆の指導者切牛の(佐々木)佐五兵衛(座位)と嘉永の一揆指導者田野畑の(畠山)多助(立位)の姿である。】



さて、この三閉伊一揆は別名「三閉伊通一揆」とも呼ばれる。盛岡藩は領内を33の「通り」に分けて統治し、このうち閉伊郡と九戸郡の一带は、大槌通、宮古通、野田通の3つの通から成っていた。これらを三閉伊通と総称したことから、こう呼ばれるのである。

天保7(1836)年から翌年にかけて盛岡藩領北上川流域の各地で打ち壊しを伴う激しい一揆が続いた。藩は横沢兵庫を家老に抜擢して財政改革に乗り出す。商工鉦業の振興で増収を図る一方、天保14年から五年間は一戸1貫800文の御用金を徴収する代わりに他の御用金は課さないとした。

ところが、4年経過の弘化4(1847)年にこれに反して新たに御用金を課した。しかも、林業、鉦業、漁業、塩業など対するもので、比較的豊かな三閉伊通に偏った賦課であったため、同年11月17日に野田通の各村から一揆が始まった。三閉伊通の農・漁民たちは、藩財政のツケを自分たちだけに払わせようとする(取れるところからむしり取る)藩主ほかの魂胆を見抜いており、藩主の交代、体制刷新を訴えるという、従来の一揆に比べると大胆な要求を掲げたのである。

#### 弘化4(1847)年の一揆

一揆の頭取(最高指導者)は閉伊郡浜岩泉村切牛(田野畑村)の百姓で弥五兵衛。70歳近い高齢だが、肝が座り体も頑健で、小本の祖父(おど)と呼ばれた。既に天保の藩政改革の前から十数年にわたり領内を歩き村々のリーダー格の家泊まっては一揆を説いて回ったという。三閉伊の人々が蜂起し合流したのは、弥五兵衛の事前調整による組織化のためだ。弥五兵衛はときに集団を先回りして村々に参加を呼びかけたと言われ、周到で計画的な行動力があった。

同年12月、悪政、増税を続ける盛岡藩主の更迭と藩政改革を要求して藩の大老職にあった遠野南部家(弥六郎)に強訴(ごうそ)。盛岡から派遣された南部土佐の説得を拒否、弥六郎に25ヶ条の願書を提出。**願書は、安家村(岩泉町)の農民俊作が書いた。**願書の中心は三閉伊通の御用金約8千4百両の免除などであった。

意外にも南部土佐は御用金免除など12ヶ条を即座に受諾したため、5日に一揆勢は解散。藩の家老横沢兵庫は免職され、藩主南部利済(としただ)も隠居せざるを得なかった。

こうしていったんは農民側の要求は認められるが、その後、盛岡藩主の裏切りに遭い首謀者が捕らわれ惨殺されたり遠島にされた。

※農民たちの要求書を書いたのは安家村(岩泉)の俊作である。受け取った遠野弥六郎をして「誠に麗しい文である。」と驚嘆させた。しかし俊作は一揆解散後、捕らえられて下北半島の牛滝(佐井村)に流罪となった。

## 嘉永6（1853）年の一揆

遠野強訴が沈静すると南部利済は背信、公約を破棄して悪政を続けた。しかも、幕府の御用や参勤交代費が足りないとして負債の打開に新税・増税をし、さらに御用金を課した。これに怒った三閉伊地方の農漁民たちが再び立ち上がった。三閉伊地方の幕府領または仙台藩領化を願い出て、仙台領気仙郡唐丹村（釜石）への越訴（おっそ）に成功し、仙台藩に政治的要求3カ条と具体的要求49カ条を提出した。10月27日、仙台藩と盛岡藩の協議により盛岡藩首脳の交代と要求項目39カ条を受け入れさせることに成功した。首謀者の処分はなく、さらにそれを保証する「安堵状」まで藩に出させることに成功した。また、下北に配流されていた安家村の俊作らも無事、家に帰された。

国内でも稀な一揆勢の完全勝利に終わったのである。



◆  
仙台藩への越訴の3日前、6月3日浦賀沖にアメリカのペリー提督率いる「黒船」四隻が現れている。幕府はこの対応に追われ、三閉伊一揆どころではなかった。仙台、盛岡両藩でも幕府から沿岸警備兵の派遣を求められていた。一揆側がこれを知っていたかどうか不明だが、実にいいタイミングでの行動だったのである。

**茶谷さんは**——参加者が16000人に上った嘉永6年の一揆の勢いは、もし「黒船騒動」がなければ、明治維新より先に日本の体制を変えていたかもしれない、とも語った。それだけ“破壊力”のある出来事が、この岩手で起きていたのである。

**※関注**…茶谷さんは触れませんでした。この嘉永6年の一揆の際には雫石通でも最大数千人も農民たちが籬野に集結して代官らに重税反対の訴願を提出しています。  
**同封資料（雫石町史）の426P以降の内容をご覧ください。**

上記のように、実は三閉伊一揆を起こしたのは、貧しい農民たちばかりではなかった。砂鉄を採り、たたらで製鉄し後の「南部鉄瓶」につながる技術を持っていた人々や炭焼き達。自ら作った塩で、獲った魚を塩蔵し「長崎俵物」と並び称されるほどの製品を作っていた漁民たち、そして、それらを遠方まで運ぶ牛方達。当時の三閉伊の人たちは逞しく、暮らしていた。この中から出た指導者たちは経済的にばかりでなく“哲学的に、思想的に豊かだった”と茶谷さんは熱く語ります。

昭和44年、初めて田野畑村を訪ねた時の「貧しい地方…」というイメージは、その後の現地踏査や人々との触れ合い、そして東日本大震災を経て、なお力強く再起する人々と民俗芸能を目の当たりにして完全に払拭されたといえます。そして講演の最後を——我々はいま改めて「心をひとつにすること」、「協同すること」、「力を合わせること」をこの一揆から受け継ぎたいものだ——と結びました。

※茶谷さんには、本講座のために価値ある詳細な資料を作っていただきました。どうぞご活用ください。【滴石史談会独自の資料（雫石町史写し）も添付】

**◆ご報告と御礼**……本紙前号で故主濱幸彦様に対するお悔やみ受けのお知らせをしたところ、さっそく次の方々から頂戴いたしました。ありがとうございました。ご芳名はお彼岸に主濱様のご自宅にお届けする予定です。 ◆林崎正・岩持斗季子・徳田庄一・曾根田優子・新里栄弘・大村昭東・熊谷ツネ子・上村雅生・石塚孝子・大谷地ミツ・岩持清美・中野昭子・池田弘子・熊谷 望（以上14名・順不同・敬称略）

**☆あとながき**…茶谷さんの2時間に及ぶご講演は中身も濃く大変好評でした。来る19日の原敬記念館の田崎先生のご講演もくちうご期待です。それにしても今から110年も前にこの一寒村雫石からフランスに雄飛する人がいたとは驚きです。その「志」はどのようなものだったのか今から興味津々です。(S)

